

<研究ノート>

先島諸島の地理・民俗・歴史 —宮古諸島と八重山諸島—

今 林 直 樹

はじめに

第1章 先島諸島の地理

第1節 先島諸島

第2節 宮古諸島

第3節 八重山諸島

第2章 先島諸島の民俗

第1節 宮古諸島

第2節 八重山諸島

第3章 先島諸島の歴史

第1節 14～16世紀の宮古諸島

第2節 14～16世紀の八重山諸島

第3節 オヤケアカハチの乱

おわりに

はじめに

沖縄は、有人島か無人島かを問わず、100を超える大小様々な島々から構成される島嶼地域である⁽¹⁾。それらは地理的まとまりを単位として沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、大東諸島の4つに区分されるが、その中でいわゆる「琉球文化圏」(琉球弧)を構成しているのが大東を除く3つの諸島である。それは歴史的に琉球王国の版図であると言うこともできる。しかし、「琉球文化」という共通の特徴を有するといっても、「琉球文化圏」自体は一様なものではなく、内部に豊かな多様性を持つ世界である。例えば、宮古諸島の中心は宮古島である。その位置はいわゆる沖縄本島の中心都市である那覇から約300km離れている。八重山諸島の中心である石垣島はそこからさらに遠く、日本最西端の島である与那国島に至っては台湾との距離が約110kmということで、国境の島として那覇よりも台湾の方が近いという地理的環境にある。島はそれ自体が一つのマイクロコスモスであり、内と外の世界が明確に分けられる環境にあるのに加えて、

こうした地理的な距離が各諸島間、そして各島間の文化的・歴史的差異をさらに拡大する大きな要因となっている。このように島嶼地域としての沖縄では、「琉球文化」という共通項を持ちながらも、それを構成する諸島ごとに、そしてそれぞれの諸島を構成する島ごとに、独特の文化が形成され、独自の歴史が展開してきたのである。

しかしながら、こうした島嶼世界である「琉球文化圏」の多様性が指摘されつつも、歴史学や民俗研究など、これまでの「琉球文化圏」を対象とする研究では、琉球王国史においても近代以降の沖縄史においても、主として沖縄本島からの視点を中心となって研究が進められ、「琉球文化圏」の共通項を明らかにすることを主たるテーマとしてきた。「琉球文化圏」研究が進展した今日、あらためて「琉球文化圏」の多様性に着目し、比較と言う視点を導入してこれまでの研究を相対化することは、今後の「琉球文化圏」研究をさらに豊かなものにし、さらなる発展へと導いていくと考えられる。

以上のことを踏まえて、本稿は、こうした多様な島嶼地域である沖縄にあって「先島諸島」と総称される宮古諸島と八重山諸島を取り上げ、その地理、民俗、歴史についてまとめることを主な目的とする。「先島からの視点」を導入することで「琉球文化圏」研究の相対化を試みたい。もちろん、本稿のような小論で先島諸島のすべての島々に言及することは困難である。そこで宮古諸島からは宮古島と多良間島、八重山諸島からは石垣島と竹富島を取り上げ、それぞれの島で形成された民俗と歴史についてまとめていくことにする。

第1章 先島諸島の地理

第1節 先島諸島

先島諸島とは宮古諸島と八重山諸島の総称である。有人島と無人島をあわせて島の数は30を超える。気候区分としては、亜熱帯海洋性気候に属しており、平均気温は23～24度である。

先島諸島に限らず、沖縄の島々はその形状から「高島」と「低島」に分類できる⁽²⁾。「高島」は標高500m前後の高い山と川がある島であり、先島諸島でいえば、八重山諸島の石垣島や西表島がその代表である。石垣島の於茂登岳は標高525mで、沖縄の最高峰であり、その山麓から宮良湾に流れ込む宮良川がある。また、西表島の古見岳は標高が約470mで西表島の最高峰であるが、西表島にはその他にも標高300～400mの山々が連なっている。「低島」は隆起珊瑚礁からなり、山はあっても標高が100m前後であって、川らしい川はない。先島諸島でいえば、宮古諸島の宮古島や多良間島、八重山諸島の竹富島などがその代表である。ちなみに、宮古島の最高標高は約115m、多良間島は約34m、竹富島は約33mであり、多良間島とともに多良間村を構成する水納島に至っては約13mしかない。

このような地形の違いは農業の違いとなって現れている。すなわち、水資源が豊富な「高島」では水田耕作が行われているが、それほど水資源が豊かではない「低島」では畑作が行われて

いるのみである。「高島」であれ「低島」であれ、そこに人が居住する以上、農業のためだけではなく、生活のためにも水資源は不可欠である。先島諸島に限らず、沖縄は夏から秋にかけて発生する台風の進路にあたっており、毎年その時期には数個の台風が相次いで上陸して大きな被害をもたらすことから、台風のマイナス面ばかりが強調されがちではあるが、その一方で、波照間永吉によれば「祭祀の世界からみると、台風を忌避するための儀礼はない」⁽³⁾とのことで、まさに台風のもたらす雨は「恵みの雨」でもあったのである。むしろ、島の人々にとって生死にかかわる最も深刻な問題は早魃であり、水不足であった。例えば、先述のとおり、先島諸島の気候は亜熱帯海洋性気候であり、年平均気温は23～24度である。このような自然環境の下に暮らす人々にとって水不足は致命的であり、生命を脅かすものであった。島々には「恵みの雨」を願う人々の祈りが「雨乞いの儀礼」としていまに伝わっている⁽⁴⁾。すなわち、島の人々は日照りが続き、水不足が引き起こされると「雨乞い」を行って天からの水の恵みを祈ったのであった。なお、現在でも島の人々にとって早魃と水不足が生活を脅かす最も深刻な問題であるというその事情は基本的には変わっていない。

第2節 宮古諸島

宮古諸島は、有人島としては、宮古島を中心として、伊良部島、下地島、池間島、大神島、来間島（以上、宮古島市）、多良間島、水納島（以上、多良間村）の8つの島々で構成される。このうち、最も大きい島が宮古島で、面積は約160km²である。次いで、伊良部島の約30km²、そして多良間島の約20km²となっている。宮古諸島の最高峰は、宮古島にあるンキャフス嶺とナカオ嶺の113mであるが、このことからわかるとおり、宮古諸島のすべてが低島である。なお、宮古諸島にはハブは生息していないが、その理由は宮古諸島の島々が平坦であるため、海面上昇、そして台風や津波などの自然災害の影響をまともに受けた結果、水没して絶滅したのであらうと言われている。

ここで、本稿で取り上げる宮古島と多良間島の地理についてまとめておこう。

(1) 宮古島

前述のとおり、宮古島は宮古諸島で最大の面積を誇り、人口も約5万5000人と最大である。

現在、宮古島は平良^{ひらら}、城辺^{ぐすくべ}、上野、下地の4つの地区に分かれており、中心は平良地区である。ここでは主として平良地区についてまとめる。

平良地区は宮古島の北部にあたる。北に向かって半島が伸びており、その先端は西平安名崎^{にしへんなざき}であり、夕日が美しいことで知られている。その先には池間島があり、宮古島とは池間大橋で結ばれている。半島中央部の島尻地区は、仮面仮装の来訪神であるパーントゥで知られている。パーントゥは旧暦9月に行われるウガンに出現する神であり、キャン（蔓草）を巻いた全身に

異臭のする泥土を塗り、祭の会場や地区内をねり歩いて災厄を祓うとともに、福を与える。なお、このパーントゥは宮古島南部の上野地区にある野原にも出現する。

平良地区の中心は平良港に面した地域で、宮古島市役所などが置かれて行政の中心となっている。歴史的に重要な遺跡も残っており、例えば、15世紀末から16世紀初めにかけて宮古島を統治した仲宗根豊見親玄雅とその三男である知利真良豊見親の墓、宮古島で最も重要な御嶽の1つで、人蛇婚説話でも知られる漲水御嶽、過酷な人頭税の記憶で語られる通称「人頭税石」（「賦計り石」）、などをみることができる。また、平良近郊には「ガー（井）」と呼ばれる井泉があることも触れておこう。「大和井」「ブトゥラ井」「盛加ガー」などがそうであるが、それらは「降り井」と総称され、その生成には宮古島の地質が関係している。すなわち、琉球石灰岩という水に溶けやすい岩層が雨水などによって浸食されて、内部に空洞ができる。雨水は水をほとんど通さない島尻層群泥岩に堰き止められ、地下水となって、琉球石灰岩の中にたまる。この地下水の一部が地表に湧き出したものが「降り井」となるのである。前述のとおり、島に生活する人々にとって水資源は貴重であり、生きるための最大の関心事であった。集落はこの「降り井」を中心に形成されて、発展していくのである。

なお、2015年1月31日、宮古島と伊良部島を結ぶ伊良部大橋が開通した。同大橋は平良港トゥリバー地区と伊良部島を結ぶ全長3540mの橋で、通行料金を徴収しない橋としては最長である。

その他の地区について簡単に触れておく。城辺地区は宮古島の東南部にあたり、国の名勝に指定されている東平安名崎がある。上野地区は宮古島の南部にあたり、前述のとおり、同地区の野原はウガンの際にパーントゥが出現する奇祭があることで知られている。下地地区は宮古島の西南部にあたり、東洋一の美しさを誇ると言われている与那覇前浜がある。与那覇からは全長1690mの来間大橋を通過して来間島へと渡ることができる。

（2）多良間島

多良間島は宮古島の西方約67kmに位置し、面積が約20km²で、形状はやや楕円形をなしている。周囲はわずかに6.5kmしかない。多良間島の集落は島の北方にまとまっており、南北の道路で西の字仲筋と東の字塩川に区分されている。島の周囲は防潮林で囲まれ、集落は抱護林で、屋敷はフクギ並木で囲まれている。抱護林は沖縄県の指定天然記念物である。また、塩川御嶽の参道に続くフクギ並木は有名で、塩川御嶽を囲むイヌマキ、テリハバク、リュウキュウコクタンなどの植物群落は天然記念物となっている。その他に、嶺間御嶽のアカギ、運城御嶽のフクギ、多良間小学校のセンダンなど「多良間の名木」に認定されているものもある。なお、多良間島にも「ガー」と呼ばれる井泉がある。村の指定文化財である「アマガー」「フシャトウガー」などがそうであるが、多良間島の土質は砂質土壌であり、地下水は豊富で長期にわたる旱魃でも枯れることはない。

多良間島には、文化遺産として豊年祭で演じられる「八月踊り」⁽⁵⁾があり、国の重要無形民俗文化財となっている。「八月踊り」の内容は「民俗踊り」と「古典踊り」「組踊り」に分けられ、仲筋集落と塩川集落とでは演目が異なっている。「古典踊り」の中には首里や那覇では既に忘れられているものがある。例えば、「組踊り」では塩川集落で演じられる「多田名組」がそうであり、芸能史の点からも重要である。また、仲筋集落の「忠臣仲宗根豊見親組」のように多良間島で作られたと考えられているものもある。

重要な史跡としては、土原豊見親^{んたばるとよみや}のミャーカがある。土原豊見親は16世紀初期に多良間島を統治した人物で、ミャーカとは宮古諸島に分布する石造の墳墓のことである。また、多良間神社にはこの土原豊見親が祭神として祭られている。その他に、宮古と八重山の名を冠した2つの遠見台があり、その役割は航行する船舶の監視や遭難船の救助などであったと考えられている。この遠見台がいつ頃設置されたかは定かではないが、琉球王国の正史である『球陽』の記事から17世紀前半以降のことではないかと考えられているようである⁽⁶⁾。

第3節 八重山諸島

八重山諸島は、有人島としては、石垣島（石垣市）を中心として、竹富島、西表島、小浜島、黒島、新城島^{あらぐすくしま}（上地と下地）、鳩間島、由布島、波照間島、嘉弥真島^{かやまじま}（以上、竹富町）、与那国島（与那国町）など、12の島々から構成される。このうち、最も大きい島が西表島であり、面積は約290km²である。次いで、石垣島の約223km²、そして与那国島の約29km²となっている。八重山諸島の最高峰は、石垣島にある標高525mの於茂登岳であり、これは沖縄県の最高峰でもある。八重山諸島の島々は、石垣島、西表島、与那国島が高島であり、その他はすべて低島である。黒島や新城島の最高標高は13～15m、由布島に至っては2mにも満たないという極端な低島である。また、波照間島は日本最南端の島であり、与那国島は日本最西端の島であるとともに、前述のとおり、台湾との距離が約110kmという国境の島でもある。

ここで、本稿で取り上げる石垣島と竹富島の地理についてまとめておこう。

(1) 石垣島

石垣島は島の面積は西表島に次いで2番目だが、人口は約5万人と最大である。人口は島の南部に集中している。島の中心には沖縄で最高峰の於茂登岳が聳えている。島の西北部の川平地区と崎枝地区には川平半島と屋良部半島と呼ばれる半島が伸びており、風光明媚な川平湾、崎枝湾、名倉湾を形成している。また、東北部には平久保半島^{いばるま}（伊原間以北）が伸びており、その先端には平久保灯台がある。その先に無人島の大地離島がある。北部には「野底マーペー」伝説で知られる野底岳がある。この伝説は、1732年、琉球王府の命により、黒島から石垣島に野底村建設のために強制移住させられた史実を背景に、強制移住により愛するカニムイと引き

裂かれたマーペーという女がカニムイ恋しさのあまりに石になるというものである⁽⁷⁾。この伝説を詠ったものが「ついでなら節」であり、今でも島の人々の間で歌いつがれている⁽⁸⁾。

石垣島の中心は石垣港に面した地域で、石垣市役所や竹富町役場などが置かれて行政や経済の中心となっている。また、石垣港を発着する船舶は竹富島や西表島、小浜島など八重山諸島の他の島々と石垣島を結んでおり、石垣港は八重山諸島の交通の拠点ともなっている。

歴史的、文化的に重要な遺跡も残っている。例えば、宮良殿内^{みやら どうんち}である。宮良殿内は、1819年頃に、当時、八重山の頭職にあった宮良当演によって、首里の士族屋敷をまねて建築された邸宅である。首里の士族屋敷は沖縄戦で焼失してしまったため、宮良殿内は建築史上でも貴重な史跡となっている。また、大浜地区には、1500年に琉球王府に対し叛乱を起こしたオヤケアカハチの像や、約2000年前に発生した先島津波によって打ち上げられた「津波大石」がある。また、石垣島東海岸には、1771年に発生し、宮古と八重山で1万1000人を超える死者を出した「明和の大津波」⁽⁹⁾の名残である「津波石群」が残っており、国の天然記念物に指定されている。

ここで、岩崎卓爾について触れておきたい。

岩崎卓爾は、1869年、宮城県仙台市の生まれで、1898年に中央气象台附属石垣島測候所の勤務を命ぜられて石垣島に赴任し、以後、40年の長きにわたって気象観測を行った。岩崎は、石垣島では「天文屋の御主前」⁽¹⁰⁾として島民から慕われ、定年退職後も气象台の嘱託職員として残り、1937年、石垣島にて68歳の生涯を閉じた。1933年4月には測候所の敷地内に岩崎の胸像が建立され、その功績が讃えられたが、岩崎は気象観測だけに留まらず、八重山の歴史や文化にも強い関心を持った。その成果は『ひるぎの一片』『やえまカブヤー』『石垣島気候篇』といった著書や、諸雑誌に発表した数多くの文章にも顕れている。その他にも、『八重山島由来記』などの史書や文書資料を全写したものもあり、いずれも八重山研究には不可欠の第一級の資料である。これらは『岩崎卓爾一卷全集』⁽¹¹⁾に収められている。なお、岩崎が先鞭をつけた八重山研究を引き継いだのが、後に「八重山研究の父」と呼ばれた喜舎場永珣^{きしゃ ばいじゅん}である⁽¹²⁾。

(2) 竹富島

竹富島は、石垣島の西南方約6.5kmのところ⁽¹³⁾に位置し、人口は300人程度である。集落は島の中央部に集中しており、村名ではンブフルの丘を境に玻座間村と仲筋村から成っているが、大きくは「西集落」「東集落」「仲筋集落」の3つに分けられる。竹富島の集落は、1978年に全体が「重要伝統的建造物群保存地区」となった。町並み保存活動も積極的に行われている。1986年には島外の大企業による土地の買い占めに反対して「売らない」「汚さない」「乱さない」「壊さない」「生かす」という5原則が『竹富島憲章』としてまとめられ、島民が一致協力して島を守るという精神は「うつぐみ」として知られ、竹富島を象徴する言葉となっている⁽¹³⁾。

竹富島は島全体が「西表石垣国立公園」に指定されており、自然環境が豊かである。中でも、

カイジ浜はかつての蔵元の港であったが、「星砂の浜」として有名になり、現在では観光名所の一つとなっている。また、コンドイ浜は沖縄でも屈指の美しい砂浜と遠浅の海岸で知られる。なお、竹富島にも「ガー」または「カー」と呼ばれる井泉がある。島では最も古いと言われている「ハナクンガー」や「ナージカー」「ミーナカー」などがそうである。繰り返しになるが、「低島」である竹富島に暮らす人々にとって水は最も重要な資源であったのである。

重要な史跡としては、16世紀に活躍した竹富島出身の政治家で、首里城の園比屋武御嶽石門を建築したことで知られる西塘にしとうの建てた蔵元跡や、西塘の墓とされる西塘御嶽がある⁽¹⁴⁾。また、コンドイ浜には「ニーラン神石」がある。ニーラン神は竹富島に五穀の種子を伝えた神であり、竹富島では、旧暦8月8日にこの「ニーラン神石」を前に「世迎え」という、ニーラン神から種子物をいただいて豊作を祈る行事が行われる⁽¹⁵⁾。なお、国の重要無形民俗文化財に指定されている「種子取祭」⁽¹⁶⁾という祭りは竹富島最大の行事であり、名称とは異なり内容は「種蒔き」の行事である。また、日本最南端の寺院として喜宝院がある。喜宝院は上勢頭うえせ とうおる亭が開山した浄土真宗西本願寺派の寺院であるが、同院には「蒐集館」が併設されており、上勢頭が集めた4000点以上に及ぶ竹富島の民俗資料が展示されている⁽¹⁷⁾。上勢頭は竹富島の民話や伝説、歌謡などを島の古老から広く収集し、それらは『竹富島誌』（「民話民俗篇」と「歌謡・芸能篇」）にまとめられて、竹富島研究に欠かすことのできない第一級の資料となっている⁽¹⁸⁾。

第2章 先島諸島の民俗

沖縄には村落の祭祀の中核、あるいは日常生活に生きる信仰の対象として、御嶽と呼ばれる聖域がある。御嶽は宮古諸島ではウタキ、八重山諸島ではオンとかワンの名称で呼ばれるが、本稿では、先島諸島にある御嶽をいくつか紹介しながら、先島諸島の民俗についてまとめる。

第1節 宮古諸島

(1) 宮古島

宮古島では漲水御嶽みなだてと船立御嶽について紹介する。

① 漲水御嶽

漲水御嶽は宮古島において最も重要な御嶽で、平良港に面したところにあり、宮古島の創世神話や人蛇婚伝説、さらには、1500年に起こったオヤカアカハチの乱に際し、当時、宮古島を統治していた仲宗根豊見親玄雅が戦勝祈願をしたことで知られている。

『琉球国由来記』には次のような宮古島の創世神話と人蛇婚伝説が記されている⁽¹⁹⁾。

(宮古島創世神話)

宮古島が出現して、まだ人間が誕生していなかったとき、天から恋角と恋玉という男神と女神が漲水に降り立ち、人間や森羅万象を生み出して天に帰った。そして、人々は

そこが神の降り立った場所であるということで、石を積み、木を植えて御嶽を立て、拜んだ。以後、人間が大いに賑わい栄えた。

（人蛇婚伝説）

平良のスミヤというところに富貴栄耀の人がいた。子どもがいなかったので、天に子どもを授かるように祈ったところ、一人の娘を授かった。この娘は見目麗しく、心根も優しく、また孝行の志も深かったので、娘を見て想いを賭けない男とてなく、夫婦にとっても自慢の娘であった。しかし、娘が14、5歳になった頃、娘に懐妊のしるしが見られたので、怪しく思った両親が娘に問いただしたところ、誰とは知らないが、白く美しい若い男が、錦の衣を身に纏い、よい香りをさせて毎夜毎夜忍んで娘の閨中に入ってきたという。そこで、一計を案じた父がその正体を探ったところ、果たして大蛇であった。両親は大いに嘆いたが、その夜に娘の夢枕に大蛇が現れ、「自分は恋角であり、この島を守護する神を立てようとして来て、あなたに想いを掛けたのだ。あなたは必ず3人の娘を生む。娘たちが3歳になったら漲水に連れてくるように。」と言った。大蛇が言ったとおり、月が満ちて娘は3人の娘を生んだ。子どもが3歳になった頃、娘は3人の子どもを父の大蛇に合わせるために漲水に行ったが、大蛇の恐ろしさに子どもを置いて逃げ帰った。残された3人の子どもは、大蛇を恐れることもなく、1人が大蛇の首に、1人が腰に、そして1人が尾に乗って抱きついた。大蛇は紅涙を流して喜び、舌で子どもたちを舐めた。大蛇は3人を宮古島の守護神にして、御嶽の中に掻き消えた。そして、光を放って天に上っていったという。

（仲宗根豊見親の戦勝祈願）

1500年、八重山諸島の石垣島でオヤケアカハチという人物が勢力を強め、琉球王府に反乱を起こしたとき、当時、宮古島を統治していた仲宗根豊見親玄雅が王府にアカハチの討伐を申し出て王府軍とともに石垣島に向った。その際、仲宗根豊見親は「勝利を得させ給え」と肝胆を砕いて戦勝を祈った。結果は王府軍の勝利に終わり、帰島した仲宗根豊見親は、神は人の信仰により威光を増し、人は神の徳により運命に添うとして、御嶽の囲いを新しくして深く信仰した。

以上が、漲水御嶽の由来である。

②船立御嶽

船立御嶽は鍛冶伝承と農業の発展に関係の深い御嶽である。『琉球国由来記』には次のような由来が記されている⁽²⁰⁾。

昔、久米島按司という人に娘がいた。娘は万事の吉凶を占ってはざさなかったが、それをねたんだ嫁が按司に讒言し、信じた按司が娘を島から追い出した。無実の娘を憐れ

に思った娘の兄は娘とともに島を後にし、宮古島に流れ着いた。娘は島のカネコ世の主という人物と結婚して9人の男子を授かった。成長した子どもたちは母を祖父の久米島按司に合わせようとして船で久米島に向かった。按司は自身の誤りを悔い、鉄巻物などを引出物として授け、宮古島に帰した。それまで宮古島では、牛馬の骨で作った農具で農作業をしていたため五穀が実らず飢饉になったこともあったが、賢き兄が鍛冶を行って鉾鎌を作り出し、五穀豊穰となって飢えを忘れるようになったという。

以上が、船立御嶽の由来である。

(2) 多良間島

多良間島では運城御嶽と泊御嶽を取り上げるが、『琉球国由来記』ではこれら2つの御嶽の由来がまとめて記されているので、本稿でもこれら2つの御嶽の由来として以下に紹介する⁽²¹⁾。

多良間島に伊知の按司夫婦がいた。慈悲深き正直者の夫婦で仏神を信仰すること篤かった。夫婦が嶺間に耕作にいったとき、津波であろうか大波が起こって人々を飲み込んだが、伊知夫婦だけは助かった。その後、男子1人、女子2人の3人の子が生まれた。男子は名を土原大殿と名づけられた。この土原大殿に「ヲソロ」という孫がいた。若い時から敬老愛幼の志が深く、朝夕に天を拝んでいた。ある時、運城御嶽と泊御嶽に神霊が光り輝いて天降るのを見たヲソロはこれを拝み、崇敬した。

その頃、塩川村に「ハリマニキヤモヤ」という悪逆無道の者がいた。人々はこのハリマニキヤモヤを排除しようと画策したが、多勢に無勢でかなわないということで運城と泊の御嶽に擁護してくれるよう仰いだ。その時、「ヲラチトノマシラベ」という7歳の子に神託が下り、「たとえハリマニキヤモヤが大勢であるといっても、ヲソロの神信仰が深いので逆賊ハリマニキヤモヤを退治することができる」とのことであった。ハリマニキヤモヤは、大勢でヨシカという里を踏み荒らして通ったので、里人が腹を立て、彼らを四方から囲んで攻めた。これに力を得たヲソロが攻め寄せてハリマニキヤモヤとその一味を残らず討ち取った。これこそ誠に神の加護によるものとして崇敬したということである。

以上が、運城御嶽と泊御嶽の由来である。

なお、ここに登場する土原ヲソロは、後に土原豊見親んたばるとよみ やしゅんげん春源となる人物であり、仲宗根豊見親にしたがってアカハチの乱に参戦した人物である⁽²²⁾。アカハチの乱後、その功績により多良間島の島主となった。後には与那国島に攻め入って鬼虎を滅ぼしたとされる。前述した土原豊見親のミヤーカはこの土原豊見親春源の墓である。

なお、多良間島には「鍛冶神のニリ」が残っており、かつて行われていた「フィゴ祭」の時、鍛冶屋が住んでいた旧居で歌われていたと言われている⁽²³⁾。

第2節 八重山諸島

（1）石垣島

石垣島では美崎御嶽と崎原御嶽について紹介する。

①美崎御嶽

美崎御嶽は、宮古島の漲水御嶽、多良間島の運城御嶽、泊御嶽と同様に、その由来がオヤケアカハチの乱に関係している。『琉球国由来記』には次のように記されている⁽²⁴⁾。

石垣島で「ナアタオホジ」という人物がオヤケアカハチと敵対していた。ナアタオホジの妹に真乙姥まいつばと古乙姥くいつばという2人の妹がいたが、古乙姥はアカハチの妻となっていた。ナアタオホジはアカハチと戦って敗れ、石垣島の古見に逃げていたが、アカハチを討つために来島した王府軍に加わりアカハチ軍を打ち破った。その時、真乙姥が神がかりしたが、王府軍の兵たちは、「もし、それが本当の神であるならば兵船を1艘も残さず、同時に那覇に恙なく守り着かせてみよ。もし、そうでないならば咎あるべし。」と言ったところ、真乙姥は少しも動ぜず、恐れなかったため、兵たちは本当に神がかりしたのだと真乙姥を敬った。

その後、アカハチは敗れた。真乙姥は「軍船が1艘でも遅れたり先に着くことなどあれば、自分の身はどうなるのだろう」と思い、美崎山に断食して籠り祈願した。すると、王府軍の50艘の船は残らず同時に那覇の港に無事着いた。これにより、この御嶽を崇敬して、航海の際には拝むようになったという。

以上が、美崎御嶽の由来である。

②崎原御嶽

崎原御嶽は、先に紹介した宮古島の船立御嶽と同様に、鍛冶伝承を持つ御嶽である。『琉球国由来記』には次のように記されている⁽²⁵⁾。

昔、大浜に「ヒルマクイ」と「幸地玉ガネ」という兄弟がいた。当時、石垣島には鋤・鍬・鎌がなく、なんとかそれを得たいと思っていた。そこで、兄弟は船を造って海に出た。船は薩州坊泊の下町というところに着き、兄弟は望みの鋤・鍬・鎌を買った。そのとき、白髪の老人が現れ、彼らに「石垣島に崇敬する神はいるか、いないのであれば授けよう」と言った。兄弟は悦んで、「ぜひ授けてほしい」と老人に求めた。老人は櫃を1つ兄弟に渡して、「この櫃は洋中で鳴る。必ずその鳴る方向に船を向けるべし。そうすれば、何事もなく島に着くであろう。島に着いたら、あなたの伯母と妹にこの櫃を開けさせなさい。」と言った。

兄弟は謹んで櫃を受け取り、石垣島に向けて船を出した。順風が吹き始めたので、こ

れも神の御風と悦び、帆を上げて洋中に乗り出した。すると、老人の言ったとおり、櫃が鳴ったので奇妙に思った兄弟は櫃を開けてしまった。しかし、櫃には何も入っていなかった。不審に思った兄弟は坊泊に戻り、老人に尋ねた。老人は「あなたがたは洋中で櫃を開けたか」と尋ねたので、兄弟はあるがままに語った。老人は櫃を封じ「洋中で決して開けてはならない」と兄弟に固く申し渡した。再び島に向って船を出したところ、追い風が吹き、櫃の鳴る方向に船を進めて大浜村崎原の泊りに帰り着いた。そこで、伯母と妹が櫃を開けてみると、神が乗り移って託宣があった。そのとき、兄弟は御嶽を建て、今に至るまで祭礼を欠かすことはないのだという。

以上が、崎原御嶽の由来である。これは「鉄器伝来」の伝説であるが、宮古島の船立御嶽のように、それが鍛冶、そして農業の発展につながったというところまでは記していない。

(2) 竹富島

竹富島は御嶽の島である。上勢頭亨の著した『竹富島誌 民話・民俗篇』には28もの御嶽が記されており、島の面積が5.42km²であることを考えると、竹富島は文字通り「御嶽の島」である。本稿では、竹富島に残る御嶽のうち最も重要な「ムーヤマ」(六山)と呼ばれる、花城、波座間、幸本(小波本)、仲筋、波利若、久間原の6つの御嶽について紹介する。なお、「ムーヤマ」については、上勢頭の『竹富島誌 民話・民俗篇』に収録されている「六酋長の土地と海の配分の伝説」に基づいて紹介していく⁽²⁶⁾。それは、竹富島に渡来した6人の酋長が島の土地を分け合うという伝説である。

①花城御嶽(酋長は沖縄から渡来した他金殿^{たがにどうん})

花城村の酋長は、少しの土地を6つに分けることは無理と思い、土地をもらうよりは広い海を多く分けてくれと真っ先に願い出て、当方から南方にわたる卯辰巳午の4ヶ所をもらい、大きな海の所有者になった。

②波座間御嶽(酋長は屋久島から渡来した根原金殿^{ねーれ かんどうん})

波座間村の酋長は耕地面を良い土地から多くと言って、波座間村を中心に美崎付近を自分のものに付けてもらい、その地で粟作につとめた。そうして粟の主として尊敬されるようになった。かわりに、海としては島の子の方向にある「ヒラソイ」「東ヌソイ」「西ヌソイ」という、3つの大岩を分けてもらった。

③幸本御嶽(酋長は久米島から渡来した小波本節瓦殿^{くぼんとう ふしかーらどうん})

幸本村の酋長は、波座間王と同様、良い土地を多く取ることを望んだ。「フウジャヌクミ」を中心として西方へ耕地を付けてもらい、大豆、小豆、赤豆、下大豆等の豆類の研究を重ねたので、豆の主として尊敬された。そして、海は西の方向の一部をもらって生活した。

④仲筋御嶽（酋長は沖縄から渡来した新志花重成殿^{あらし ばなかきなりどうん}）

仲筋村の酋長は、竹富島の中央を選んで、アラ道から、ンブフル、仲筋フウヤシキまでの耕地をもらいうけ、麦作を研究したので、麦の主として尊敬された。海は戊亥の方向を二部自分の海としてももらいうけた。

⑤波利若御嶽（酋長は徳之島から渡来した塩川殿^{すーがーどうん}）

波利若の酋長は、やさしい欲のない方で、5名の選び残りによいとのことから、美崎原にある新里村の土地の一角をもらい、海は寅の方向の一部をうけて、ハイヤビーと名づけた。そして、自分は6名の内一番後輩である、先輩たちの諸作物に一番大切な天の恵みである雨を祈り、島の豊作を祈念する、ということから雨の主となった。

⑥久間原御嶽（酋長は沖縄から渡来した久間原発金殿^{くま はらつんがにどうん}）

久間原の酋長は、良い土地より悪い石原を多く持ち、その土地に植林をして人民の幸福をはかることが望みだった。そのため石の多い野原を取り、ヒシャル山、ヘーマジタイ、クムクシマフ、カイジを所有地にし、石原に木を植え、竹富島の山林の主となって人民から山の神として尊敬された。また、海の方は、未申にある「ヒサラビーナノウービー」を自分のものとした。

6人の酋長は自分の担当した職を神司に告げたので、竹富島の6人の神司はその由来から、土地や海を祝詞に唱え、麦、粟、豆、山、海、雨、この6つに分かれた主の神として6つの御嶽を創立したと言うことである。

以上が、「六酋長の土地と海の配分の伝説」である。この伝説にしたがい、花城御嶽は「海の神」を祭り、そして、波座間御嶽は「粟の神」、幸本御嶽は「豆の神」、仲筋御嶽は「麦の神」、波利若御嶽は「雨の神」、久間原御嶽は「山林の神」をそれぞれ祭っている。

この伝説は竹富島の主として農業に関わる伝説であるが、前述のとおり、竹富島は「低島」であり、高い山も川もない。そのため、残された伝説も穀物でも米ではなく粟、麦、豆の神々が祭られ、植林をして山を造る山林の神、そして旱魃や水不足を恐れるということから、雨の神を祭り、雨乞いをして豊作を祈るのである。

なお、波座間の酋長である根原金殿には鉄にまつわる伝説が残っている⁽²⁷⁾。

以上、宮古諸島と八重山諸島に残る御嶽にまつわる伝説を紹介してきた。ここでは次の点を指摘しておきたい。すなわち、先島諸島における鍛冶伝承と御嶽の建立の関係である⁽²⁸⁾。宮古島の船立御嶽、石垣島の崎原御嶽、御嶽ではないが多良間島の「鍛冶神のニリ」、そして竹富島の根原金殿伝説など、鍛冶、あるいは鉄器の導入に関する話が島々に残っている。それはいずれも外から渡来したものであり、農業の発展とともに語られる。鉄器の導入、製鉄技術の普及は島の生活を大きく変えた。そのことがそれを伝えた人物を、フィクションであれノンフィクションであれ、神として崇敬することになった。そして御嶽が建立されたのである。御嶽の信

仰はまさにそれが人々の生活に根差したものであるからこそ、今日までその信仰が受け継がれてきているのである。

第3章 先島諸島の歴史

本章では、これまで断片的に触れてきたオヤケアカハチの乱を含めて、14～16世紀における先島諸島の歴史をまとめていく。

第1節 14～16世紀の宮古諸島

宮古島に政治勢力が形成されたのは14世紀末頃のことである。『宮古史伝』を著した慶世村恒人は宮古島の歴史を政治勢力の首長の地位により「天太の代」「按司の代」「殿と代」「豊見親の代」「大親の代」の5期に区分している⁽²⁹⁾。このうち、「天太の代」から「豊見親の代」までが14世紀末から16世紀初頭にあたる時代である。「按司の代」「殿の代」はほぼ同時期にあたり、宮古島の歴史においては「群雄割拠」の時代であり、争乱の時代である。この時代、宮古島の各地で有力者が按司を名乗り、次いで殿を名乗る有力者が現れて、それら諸勢力の間で抗争が繰り返された。按司や殿は「七兄弟」と呼ばれる一種の同盟を結んで敵対する勢力に対抗することもあった。この乱世が終わって迎えた統一の時代が「豊見親の代」であった。すなわち、宮古島の歴史において、14世紀末から16世紀初頭は宮古島が「分裂から統一へ」と移行する重要な時代であったと位置づけることができる。本稿ではこのうちの「豊見親の代」に焦点を当て、具体的には仲宗根豊見親玄雅についてまとめていきたい。

仲宗根豊見親玄雅は、『忠導氏系図家譜正統』によれば、童名を空広といい、明の天順年間(1457～64年)に生まれ、嘉靖年間(1522～66年)に亡くなったとされている⁽³⁰⁾。この仲宗根豊見親玄雅を宮古島の歴史の中に位置づけるとき、二つの系譜について考えなければならない。すなわち、一つは目黒盛豊見親めぐろもりとよみやの系譜であり、もう一つは与那覇勢頭豊見親よなはせとよみやの系譜である。

まず、目黒盛豊見親の系譜についてである。先の『忠導氏系図家譜正統』によれば、仲宗根は目黒盛の玄孫にあたる⁽³¹⁾。「按司の代」「殿の代」は「群雄割拠」の時代であり、各地の按司や殿が勢力を競い合っていたが⁽³²⁾、その中で有力な按司の一人が佐多大人であった。佐多大人は、与那覇原村を拠点に勢力を誇り、その後、周辺地域を次々と征服していった。この佐多大人と対立する有力者が目黒盛であった。目黒盛は根間大按司の血を受け継ぐ人物であり、領土争いに端を発したイナピゲ森の戦い、稲葉嶺の戦いで敵対する「七兄弟」を破り、勢力を拡大していた。最終的に、宮古島の統一は佐多大人と目黒盛の勝敗に委ねられ、決戦は目黒盛の勝利に終わった。目黒盛は宮古島に安定をもたらし、初めて「豊見親」の称号を名乗ったのであった。

もう一つは与那覇勢頭の系譜である。目黒盛が破った与那覇原軍の残党に、童名を真佐久と

いう人物がいた。これが後の与那覇勢頭豊見親である。琉球王国の正史である『球陽』には、「大明洪武年間、宮古山の主、与那覇勢頭豊見親なる者有り。童名は真佐久。此の時、本島は兵乱大いに発し、防戦弑奪して干戈息まず。雄を争ひ勇を待みて自ら島主と為る。」と記されており、与那覇勢頭は目黒盛豊見親の代より後に豊見親になったと考えられる⁽³³⁾。『球陽』によれば、与那覇勢頭は打ち続く兵乱が民に塗炭の苦しみを与えているとして島に安定をもたらすために、宮古島からは初めて中山王に朝貢した⁽³⁴⁾。1390年のことであった。この与那覇勢頭から豊見親の地位を継承したのが大立大殿であった。そして、大立大殿から、その性質が敏捷にして才智が群を抜いて優れているとして、珍宝を扱う如き寵愛を受けたのが空広、すなわち、後の仲宗根豊見親玄雅である⁽³⁵⁾。先述のとおり、目黒盛派と与那覇原派は宮古島の統一を巡って覇を競ったが、この逸話からは宮古島が統一されて以後、大立大殿の代には両派の対立に終止符が打たれ、協調へと変わっていたことがうかがわれる。

仲宗根豊見親玄雅はこうした豊見親による安定した統治を背景に宮古島のより一層の繁栄に尽くした。その功績を稲村賢敷にしたがってまとめると次のとおりである⁽³⁶⁾。第1に、水資源の確保である。仲宗根豊見親は飲料水用の井戸開掘工事を行って水資源の確保に努めた。第2に、八重山諸島の石垣島で起こったオヤケアカハチの乱の鎮圧である。この乱については後述する。第3に、王府の命を受けての税制の確立である。仲宗根豊見親は収税のための行政機関として蔵許政庁を設置して王府に納付した。第4に、下地橋道の築造である。この橋は下地町字上地の北方にあたり、崎田川の川口に至るまでの沿岸に沿って架せられた石橋であり、当時としては比類のない大土木工事であった。第5に、与那国島出兵である。仲宗根豊見親は、16世紀の初頭、中山王府の命に服さなかった与那国島の鬼虎を攻め、これを滅ぼした。最後に、仲宗根豊見親が「伝家の宝」としていた宝剣を琉球王国第2尚氏第3代尚真に献上したことである。

本稿では、上記の仲宗根豊美緒親の功績のうち、オヤケアカハチの乱を取り上げて、八重山諸島の歴史とあわせてまとめていく。

第2節 14～16世紀の八重山諸島

前述のとおり、与那覇勢頭豊見親が中山王に朝貢したのは1390年のことであった。『球陽』によれば、与那覇勢頭豊見親は中山への朝貢を決定するにあたり、宮古の平屋地の神と八重山の宇武登嶽の神が元は兄弟神であるということからともに中山に朝貢することになったという⁽³⁷⁾。当時の八重山諸島がどのような状況にあったかははっきりしないが、与那覇勢頭豊見親に相当する統一的指導者の名が出てこないことから、八重山諸島は政治社会としては未成熟の段階にあったと考えられる。八重山諸島において政治勢力の台頭がはっきりしてくるのは15世紀末のことである。具体的には、石垣島では大浜地区のオヤケアカハチ、石垣地区な-たう ふしゅの長田大翁主、平久保地区ひらくぼかなあじの平久保加那按司、川平地区なかまみつけ-まえいきよくの仲間満慶山英極、西表島では慶来慶田けらいけ だぐすくようちよ城用緒、波照間

島では明宇底獅子嘉殿、そして与那国島ではサカイ・イソバなどである。15世紀末の八重山諸島は、文字どおり、「群雄割拠」の時代であった。

上記のうち、慶来慶田城用緒については『慶来慶田城由来記』（以下、『由来記』）という10代にわたる慶来慶田城氏の記録が残されている⁽³⁸⁾。『由来記』は西表島に関する記事を中心としつつ、当時の八重山諸島における政治、社会、経済の状況や習俗、伝承が記されている貴重な資料である。そこで、本節では慶来慶田城用緒に焦点をあててまとめることにする。

『由来記』によれば、慶来慶田城用緒は外離島の野底辻に居所を置いた有力者の一人であり、錦芳氏の祖となった人物である⁽³⁹⁾。後に王府から西表首里大屋子という役名を授けられている。

『由来記』に記された慶来慶田城用緒に関する記事において重要なのは次の3点である⁽⁴⁰⁾。

第1に、慶来慶田城用緒が平久保加那按司を討ったことである。『由来記』によれば、平久保加那按司は平久保村近辺の小さな村々の者を集めておどしつけ、自分に従わせて下人のように使っていた。慶来慶田城は、平久保加那按司が稲、粟を作って4～500石ほど貯え、牛馬を3～400頭も飼い、威勢を振るっていると聞いて、平久保加那按司を訪ねて石垣島を訪れた。しかし、平久保加那按司は慶来慶田城に対して「ただ米の洗汁を吞ませて追い返せ」と冷たくあしらったために慶来慶田城は立腹し、平久保加那按司の暴政に不満を持つ村人と謀って平久保加那按司とその妻子を討ち果たした。平久保村やその近辺の小村の人々はこれを大いに喜び、うち揃って慶来慶田城に礼を述べたという。八重山諸島の「群雄割拠」時代における諸勢力間の抗争の一端をうかがうことができる逸話である。

第2に、平久保加那按司を討ち果たした慶来慶田城が石垣地区の長田大翁主を訪ねて兄弟の契りを結んだことである。慶来慶田城用緒は長田大翁主を石垣に訪ねた際、「西表島に慶来慶田城という人物がいることを聞き及んでおり、会いたいと思っていた」と長田から丁寧なもてなしを受けた。その後、3日間、石垣に滞在し、自分が平久保加那按司を討ち果たしたことも告げた。そして、長田との間に兄弟の契りを結ぶのである。その後、慶来慶田城は外離島に帰ったが、居所であった野底辻では土地が狭く、村を建てることもできず、諸事を調えることが不自由で思うようにならないという理由から西表島の祖納そないにわたり、次いで東石屋に移った。当時はまだ西表島が王府の支配するところとはなっていなかったが、その2～3年後に王府の支配下に入り、八重山の全体が豊かになったという。慶来慶田城は長田とともに王府に忠誠を尽くしたので、出世してついに首里大屋子の役を与えられた。

これも「群雄割拠」時代の様相であるが、慶来慶田城と長田の「兄弟の契り」は、前述の宮古島の「七兄弟」の例にあるように、八重山諸島における諸勢力間の同盟の一例として理解できるであろう。これはやがてオヤケアカハチの乱においてはっきりとしたかたちをとることになる。

第3に、当時の宮古島と八重山との関係がうかがわれることである。すなわち、宮古島の豊見親による八重山支配である。これは正確には慶来慶田城家2代目の用庶の代の記録であるが、八重山諸島がまだ王府の支配下に入っていない頃、宮古島の豊見親が八重山諸島を支配し、年々、きや木（キャンギ）、おもと竹、いく木（モッコク）、桑木を豊見親の家の建築資材として納めさせていたといい、さらに、蔵の建築資材としてよし木（イスノキ）、かし木を納めるよう求められたため、やむなく伐採していたところに豊見親が亡くなったとの知らせが届いたので、伐採した木を川に打ち捨て、アヤグを歌い、酒を飲んで大いに喜んだという⁽⁴¹⁾。

八重山諸島は、与那覇勢頭豊見親にしたがって宮古島とともに中山に朝貢することを決めたが、それ以後、宮古島における豊見親の支配が確立するにしたがって、豊見親による八重山支配が強まっていったと考えられる。

繰り返しになるが、上記の3点からは、慶来慶田城用緒の頃の八重山諸島が文字どおり「群雄割拠」の時代を迎えていたことがうかがわれるとともに、当時の八重山諸島が宮古島の豊見親による実質的な支配を受けていたことがうかがわれる。これら八重山諸島における勢力図が大きく変化し、さらに八重山諸島と宮古島との関係、そして王府との関係が大きく変化していく契機となったのがオヤケアカハチの乱である。次節では、オヤケアカハチの乱についてまとめていきたい。

第3節 オヤケアカハチの乱

八重山諸島の石垣島でオヤケアカハチの乱が起こったのは1500年のことであった。このアカハチの乱について、『球陽』は次のように記している⁽⁴²⁾。

八重山は、洪武年間より以来、毎歳入貢して敢へて絶たず。奈んせん大浜邑の遠弥計赤蜂保武川、心志驕慢にして、老を欺き幼を侮り、遂に心変を致して謀叛し、両三年間、貢を絶ちて朝せず。

文中、「遠弥計赤蜂保武川」とあるのがオヤケアカハチである⁽⁴³⁾。このアカハチの乱によって、八重山諸島の情勢が大きく動いた。さらに、この乱には宮古島の仲宗根豊見親が深く関与した。そして、当時は琉球王国の全盛期を築いた第2尚氏王統3代目の尚真の時代であった。結果として、この乱を契機に尚真治下の琉球王国による先島支配が確固たるものになっていくことになるのである。

はじめに、このオヤケアカハチの乱について、主として『球陽』の記述によりながら、概観しておきたい⁽⁴⁴⁾。

先述のとおり、八重山諸島は与那覇勢頭豊見親統治下の宮古島とともに、当時の察度時代の

中山に初めて朝貢した。以後、八重山諸島は中山、次いで琉球王国に対して朝貢を続けていた。しかし、この乱に先立つ2～3年前、石垣島の大浜に拠点を置いて勢力を拡大したアカハチが王府への謀叛に及び朝貢を停止した。このアカハチの動きに抵抗したのが石垣の長田大翁主であった。長田には那礼塘なれとう、那礼嘉佐成なれかきなりという弟と真乙姥、古乙姥という妹がいた。長田はアカハチに従うことをよしとせずアカハチと戦闘を交えるに至った。しかし、敗れたために、自身は西表島の古見に逃げて洞窟の中に隠れ住み、那礼塘、那礼嘉佐成の2人の弟は殺害された。

長田に与していた人物の一人が仲間満慶山英極であった。岩崎卓爾の『ひるぎの一葉』に収録された伝承によれば⁽⁴⁵⁾、仲間は長田の帷幕の裡にあって内外のことに執掌してたびたび功績を挙げた。その生活は「生来質素簡朴尚武ノ生活ヲ続ケ凡容凡俗ヲ脱シタリ」というものであったが、ある日、アカハチが敵の虚実を探ろうとして仲間を訪ねた際に、仲間を手強い相手とみたアカハチが謀略を用いて仲間を殺害した。その知らせを受けた長田は「余ガ右手ヲ切断サル」と深く嘆いたという。アカハチが謀叛に及ぶ直前のことであろうと思われる。

波照間島の明底獅子嘉殿もまたアカハチに従わなかった⁽⁴⁶⁾。アカハチは各地に檄文を飛ばしてともに王府と戦うよう促したが、明底は王府への忠誠をとってアカハチに従わなかった。そこで、アカハチは石垣島平得村たきちやの嵩茶、大浜村ぐるしの黒勢らを遣わしてどうにか説得を試みたが成功せず、明底はついに嵩茶らに殺害された。

こうしたアカハチ優勢という八重山諸島の動きを見、さらにアカハチが宮古島を攻めようとしたことを受けて、王府に対してアカハチ討伐を進言したのが宮古島の仲宗根豊見親であった。稲村賢敷によれば、仲宗根豊見親は宮古島と八重山諸島の離島同盟を模索していたともいうが、アカハチが仲宗根豊見親の提案を受け入れなかったこと、そして宮古島攻略をも考えるに至り、仲宗根は王府側につくことを決意したという⁽⁴⁷⁾。こうして、尚真は、総大将の大里をはじめ、銭原など9名の將軍を兵卒3000余名、大小の戦船46隻とともに八重山に派遣した⁽⁴⁸⁾。2月2日に那覇を出発した王府軍は、仲宗根豊見親の先導によって八重山に向い、13日に到着した。仲宗根が率いた宮古軍の中には、後に多良間島を統治する土原豊見親春源もいた。そして、西表島に逃げ隠れていた長田大翁主と合流してアカハチ軍と戦闘を交えた。上陸した王府軍に対し、アカハチ軍は峻しい崖を背面に、海を正面にして布陣した。さらに、女性たちが手に枝葉を持って天地に呪罵して迎え撃った。大里は慎重を期してアカハチ軍と正面から戦うことをせず、46艘の船団を二手に分け、一隊に登野城を、もう一隊には新川を攻撃させた。この大里の作戦が功を奏してアカハチ軍は大敗し、アカハチは捕えられたうえ殺害された。『ひるぎの一葉』に収録された伝承では、(アカハチの)「軍容俄カニ振ハズ運命尽キテ海ニ逃レントシテ浜ノ岩石ニ佇ム。王軍追躡シ来リソノ首級ヲ見ザレバ甘心セザル報ヲ聞キ、残念ト叫ビカヲ入レ踏ミシ足跡ヲ石面ニ印シ行跡ヲ暗マシタリ」とある⁽⁴⁹⁾。なお、長田の妹でアカハチの妻となっていた古乙姥はアカハチに与したとして殺害された。

こうしてアカハチの乱は王府軍の勝利で終わった。

乱後の論功行賞は次のとおりである。まず、仲宗根豊見親は宮古頭職の地位を得た⁽⁵⁰⁾。その次男である祭金まつりがねは八重山頭職となった⁽⁵¹⁾。これは宮古島が八重山を名実ともに支配下に置いたことを意味した。仲宗根豊見親に従った土原春源は多良間島主となり、豊見親の称号を与えられた⁽⁵²⁾。長田大翁主は西表の頭職である古見大首里大屋に任じられ、妹の真乙姥は大阿母職を与えられたが、それを平得村の多田屋ただやおなり遠那理に譲り、自らは永良比金に任じられた⁽⁵³⁾。大阿母と永良比金はいずれも世襲職である。慶来慶田城用緒は西表首里大屋に任じられた⁽⁵⁴⁾。なお、アカハチの乱の時点ではすでに殺害されていた明底獅子嘉殿については、その3人の息子に与人職、3人の娘に対しては褒美が授けられた⁽⁵⁵⁾。

ここで西塘について触れておきたい。『球陽』によれば、竹富島出身の西塘はアカハチの乱を機に王府軍を指揮した大里に見出されて大里とともに首里へとわたった⁽⁵⁶⁾。いわゆる「西塘の首里上り」である。西塘が大里にその才能を見出されたのか、それとも召し取られたのかは見解が分かれるが⁽⁵⁷⁾、首里に上った西塘はその後王府に登用され、園比屋武御嶽石門や弁ヶ嶽石門の建設、さらには首里城城壁の修築を指揮したという⁽⁵⁸⁾。西塘はこの園比屋武御嶽石門の完成を機に、帰郷を願って許され、1524年、武富大首里大屋に任ぜられて竹富島に帰郷した。なお、『球陽』によれば、西塘は園比屋武御嶽石門を建てるにあたり、これで故郷の竹富島に帰ることができたならばこの御嶽の神を竹富島に供養すると祈ったと言われ、帰郷後、西塘は竹富島に国仲御嶽を建て、園比屋武御嶽の神を祭った⁽⁵⁹⁾。西塘については、アカハチの乱にどのように関わったかははっきりとはしないが、竹富島に帰郷した西塘は竹富島に蔵元を設置し、八重山統治の拠点とした⁽⁶⁰⁾。後にそれは石垣島に移設されることになるが、西塘がアカハチの乱後の王府による八重山統治に深く関わったことは間違いないであろう。

ところで、なぜアカハチは王府に対して反旗を翻したのであるだろうか。その原因については、諸説がある。まず、『球陽』の記述によれば、アカハチの謀叛は「心志驕慢ニシテ、老ヲ欺キ幼ヲ侮リ」というアカハチ個人の傲慢な性格が理由である。岩崎卓爾の『ひるぎの一葉』に記されたアカハチの出生に関する伝承にはアカハチの容貌について「容貌魁偉、頭髮赤緒、長ク垂レ、齒ハ巳ニ成人ノ如ク生イ眼光人ヲ射殺ス」とその尋常ではない怪悪さが強調されているが⁽⁶¹⁾、こうしたアカハチの性格や容貌でアカハチの乱のすべてが説明できるわけではもちろんなく、こうしたアカハチ像はアカハチを王府に対する逆賊とする立場から創作され誇張されたものと考えられる。

次に、王府による過酷な収奪に対するアカハチの義憤を理由とするものである。『ひるぎの一葉』には「力役納税ノ酷、民ノ枉屈ヲ救ハント欲シ、曩キニ琉球王に納ムベキ年貢ヲ廢シ料地ヲ奪ヒタリ、乱民之ニ披靡シテ氣勢決河ノ如ク、堂々タル勇決他村ニ殊絶シタリ」とあり⁽⁶²⁾、それによれば、アカハチは王府からの重税に苦しむ民を救うために立ち上がった英雄というこ

となる。アカハチが英雄であるか逆賊であるかは別として、牧野清は、アカハチの乱が尚真治下の中央集権政策が確立していく過程で起こったとして、そうした背景から王府による先島への貢租の増額負担強制などという強い締めつけがあったのではないかと推測している⁽⁶³⁾。

最後に、宮古島の仲宗根豊見親との抗争を理由とするものである。すなわち、与那覇勢頭豊見親以後、八重山諸島と宮古島との間に宮古島を優位とする関係が築かれていたことへの抵抗であり、それを可能にしたのが八重山諸島における政治勢力の台頭であった。先の『慶来慶田城由来記』に記された豊見親による八重山支配はアカハチの乱以後のことであるが、アカハチの乱以前にそれに近い状況があったのではないかということである。この点を強調するならば、アカハチの乱は、崎山直の指摘にあるように、王府への謀叛ではなく宮古島を含めた群雄間の勢力争いに過ぎなかったということになる⁽⁶⁴⁾。

なお、『球陽』に記されている八重山諸島開闢の神とされる「イリキヤアマリ」の信仰に対する王府の弾圧にその原因を求める説もあるが、その記述が『球陽』の尚真と尚貞の2か所に出てくることから、稲村賢敷などの指摘にあるように、現在ではその記述を根拠にアカハチの乱の原因を信仰問題に求めることには無理があるとされている⁽⁶⁵⁾。

では、アカハチの乱は宮古と八重山にいかなる結果をもたらしたのであろうか。端的に言えば、それは王府による先島支配の確立である。与那覇勢頭豊見親以降、宮古と八重山は中山への朝貢を続けてはいた。それは先島の中山への服属を意味するものではあったが、先島が沖縄本島に拠点を置く王府からは地理的に遠く離れていたために、それは名目的なものであり王府の支配に実質的に組み込まれてはいなかった。しかし、アカハチの乱以後は、王府による先島支配が、仲宗根豊見親や長田大翁主など先島の政治勢力を通じて、実質的な支配へと変わっていった⁽⁶⁶⁾。すなわち、先島は尚真治下で進められた琉球王国の中央集権体制の中にしっかりと組み込まれていくのである。

おわりに

以上、本稿では先島諸島の地理、民俗、歴史についてまとめてきた。

本稿の冒頭に記したように、「琉球文化圏」は「琉球文化」という共通の特徴を有するとはいえ、「琉球文化圏」自体は一様なものではなく、内部に豊かな多様性を持つ世界であった。本稿では宮古諸島と八重山諸島から「琉球文化」にアプローチすることであらためて「琉球文化圏」の多様性ととともにその重層性を確認した。こうした先島諸島からの視点は必ずしも琉球王国時代の歴史や文化に対するアプローチにのみ限定されるものではない。例えば、第2次世界大戦最末期の沖縄戦を経て1945年から72年まで米軍統治下にあった沖縄にあって、沖縄諸島の行政機構と並んで、宮古諸島では宮古支庁から宮古民政府、宮古群島政府へと、八重山諸島では八重山支庁、八重山民政府、八重山群島政府へと行政機構が変遷した。それらは沖縄を連邦制の

粹組みで再編しようという米軍の意図を反映していたと言われるが、こうした沖縄、宮古、八重山の各諸島を単位とする行政機構は1952年には統一的な琉球政府へと移行していくとはいえ、この時期に沖縄が、宮古が、そして八重山がどのように時代に向き合ったのかを分析するために、琉球王国時代を含めた沖縄と宮古、八重山の歴史的相互関係を理解しておくことは不可欠である。こうした点でも、本稿で扱った「先島からの視点」が重要であることは強調しておきたい。

しかし、本稿で扱ったのは宮古諸島では宮古島と多良間島、八重山諸島では石垣島と竹富島のみであり、文化や歴史についてもその全体を取り上げたわけではない。それらは先島諸島のほんの一部にすぎない。今後の先島研究はこれまで以上にそれぞれの島という空間、そしてそれぞれの島に流れる時間を横糸と縦糸にしながら一層進展していくことが望まれる。それは今後の「琉球文化圏」研究の裾野を広げ、さらに豊かにしていくことになるのである。

註

- (1) 沖縄の地理的概要については、次の文献を参照。安里進、高良倉吉、田名真之、豊見山和行他編、『沖縄県の歴史』、山川出版社、2004年、2-11頁。
- (2) 同前、7頁。
- (3) 波照間永吉、「八重山一風土と歴史そして祭祀習俗一」、網野善彦、大隈和雄、小沢昭一他編、『列島の神々：竹富島の種子取祭 上川地方のイヨマンテ』、平凡社、1992年、所収、37頁。
- (4) 雨乞いの儀礼に関して、岩崎卓爾は次のような一文とともに「雨乞ひ祭」の歌詞を紹介している（伝統と現代社編集部編、『岩崎卓爾一卷全集』、伝統と現代社、1974年、45-47頁）。

州南諸島原来水ニ乏シク雨水ヲ潑留シテ飲料トナス。農界ニハ五風十雨ヲ歌ヒ、単ラ天恵ノ揺籃ニ眠リ為之、人情時ニ激変シテ反覆定マラズ。剛強雄邁ノ性格ナシ、故ニ産業多種多様ナラザル也。寄語ス、北方文明の積極的タルニ反シ南方文明ノ消極的ナル所以カ。左ニ雨乞ヒノ歌詞を録セン、寧ロ哀調ナルモ簡浄素樸ノ点ニ於テ雄篇タルベキモノナラン。

- (5) 「八月踊り」については、多良間村文化財保護委員会編、『たらしまの八月おどり』、2006年、参照。
- (6) 『球陽』には、尚賢治下の1644年に久米、慶良間、渡名喜、粟国、伊江、葉壁等の島々に初めて「烽火」を置いたとあり、多良間島への「遠見台」設置はそれ以降と考えられる（球陽研究会編、『球陽 読み下し編』、角川書店、1974年、188頁）。
- (7) 「野底マーペー」伝説とそれに関する強制移民については、次の文献を参照。高木健、「石化伝説一野底マーペーに見る世界一」、八重山文化研究会、『八重山文化論集』第2号、ひるぎ書房、1980年、231-247頁。喜舎場永珣、「野底マーペーとチンダラ節一男を慕って石と化す強制移民の哀話一」、『八重山民俗誌』下巻、沖縄タイムス社、1977年、177-182頁。岩崎卓爾、「天然伝説（山ニ関スル伝説） 其の二」、『ひるぎの一葉』（伝統と現代社編集部編、前掲書所収）、33頁。牧野清、「野底村」、石垣繁編『石垣島白保村以北の旧村々一牧野清生誕百年記念論集一』、2011年、所収、163-191頁。なお、この伝説のもととなった野底村建設に関しては、『球陽』に次のように記されている（前掲『球陽』、302頁）。

八重山野底村を創建して黒島の民人を分移す。

八重山黒島は、本島を離ること海路五里の外に在り。田地甚だ狭く、人民増繁し、飲食堪へ難し。

川平村属地に一曠野有り。名づけて野底と叫ぶ。泉甘く土肥え、宜しく五穀を種うべし。黒島の民人、往来には舟を用ひ、田を耕し地を鋤き、以て労苦を為す。是れに由りて、在番官・酋長呈請して、彼の島民人四百余名を分けて、此に移住せしむ。乃ち之れを叫んで野底村と曰ふ。因りて与人一人・目指一人を設けて総理せしむ。

- (8) 黒島の民謡である「ついんだら節」については、喜舎場永珣は、前掲論文において、移民事業の裏面にある実に関に堪えない悲哀なロマンスを歌った悲曲であるとし、そのメロディは聞く者をして胸をえぐられる思いをさせるものだと述べている（喜舎場、前掲論文、178-179頁）。また、牧野清は、前掲論文において、「当時強制移住させられた人々が、不本意ながら泣く泣くと、役人の命令に服従せしめられて寄人となり、島を後に別れていったうらみつらみの気持ちが歌いこまれ、今に歌いつがれている」と記している（牧野、前掲論文、164頁）。
- (9) 「明和の大津波」については牧野清による詳細な研究がある。牧野清、『改訂増補 八重山の明和大津波』、1981年。
- (10) 芥川賞作家の大城立裕は岩崎を主人公にして「風の御主前一小説・岩崎卓爾伝一」を書いており、『大城立裕全集』第7巻に収められている。
- (11) 伝統と現代社編集部編、『岩崎卓爾一卷全集』、伝統と現代社、1974年。
- (12) 岩崎卓爾をはじめとして喜舎場永珣や牧野清などの八重山研究者については、次の文献を参照。三木健、『八重山研究の人々』、ニライ社、1989年。
- (13) 「竹富島憲章」と「うつぐみ」については、次の文献を参照。上勢頭芳徳、「竹富島一島を美しく守るうつぐみの心」、西村幸夫、埴正浩編、『証言・町並み保存』、学芸出版社、2007年、所収。
- (14) 西塘については、次の文献を参照。上勢頭亨、与那国善三編、『西塘伝』、沖縄西塘会、1957年。西里喜行、「西塘考」、『琉球大学教育学部紀要』第32集、1988年、99-106頁。『星砂の島』6号、瑞樹書房、2002年。なお、同号は西塘の特集号である。
- (15) 上勢頭亨は「ニーラン神」と「世迎え」について、『竹富島誌 民話・民俗篇』（法政大学出版局、1976年）で、大和の根の国から「ニーラン神」という神が種々の種子物を積んだ船に乗って竹富島に到来したこと、ニーラン神が竹富島の「ハヤマワリ=ハイクバリ」の神に命じて種子を八重山の9か村に分け与えたこと、竹富島では旧暦8月8日に「世迎え」というニーラン神から種子物を戴いて、竹富島の豊作を祈るという行事があることを紹介している。
- (16) 種子取祭については、次の文献を参照。網野、大隈、小沢他編、前掲書。狩俣恵一、「沖縄・竹富島の種子取祭の伝承」、宮城学院女子大学、『沖縄研究ノート』10、2001年、1-19頁。
- (17) 上勢頭亨ならびに喜宝院蒐集館については、次の文献を参照。上勢頭同子、「父の思い出一教えを仰いだ人たち」、『沖縄文化—沖縄文化協会創設40周年記念誌一』、『沖縄文化』編集所編、ロマン書房、1989年、775-780頁。阿佐伊孫良、「竹富島喜宝院蒐集館文書と上勢頭亨」、竹富町史編集委員会編、『竹富町史 第10巻資料編 近代1』、所収、10-18頁。外間守善、「上勢頭亨さんと竹富島」、『沖縄学への道』、岩波書店、2002年、307-311頁。
- (18) 上勢頭亨、『竹富島誌 民話・民俗篇』、法政大学出版局、1976年。同、『竹富島誌 歌謡・芸能篇』、法政大学出版局、1979年。
- (19) 外間守善、波照間永吉編、『定本 琉球国由来記』、角川書店、1997年、472-474頁。引用文は読みやすくするために必要部分を要約し、表記を現代文に改めてある。本節におけるその他の引用文についても同様である。なお、宮古島の創生神である「恋角」と「恋玉」については、『宮古島旧記』では「古意角」「姑意玉」と表記されている（稲村賢敷編、『宮古島旧記』（上巻）、宮古報知印刷所、1953年、1頁）。
- (20) 同前、476頁。
- (21) 同前、481-482頁。
- (22) 土原豊見親に関する伝説については、次の文献を参照。多良間村史編集委員会編、『多良間村史 第1巻 通史編 島のあゆみ』、多良間村、2000年、40-42頁。原田信之、「沖縄・多良間島の土原豊見親伝説」、『新見公立短期大学紀要』、第27巻、2006年、239-257頁。
- (23) 多良間島の「鍛冶神のニリ」を含め宮古諸島の鍛冶伝承については、次の文献を参照。下地和宏、「宮古における鍛冶伝承」、宮古島市総合博物館編、『宮古島市総合博物館紀要』、第17号、2013年、

- 128-141頁。なお、同論文は奄美沖縄民間文芸学会編集委員会編、『奄美沖縄民間文芸学』第12号、2014年、39-49頁にも掲載されている。
- (24) 外間、波照間編、前掲書、489-490頁。
- (25) 同前、491-492頁。
- (26) 上勢頭亨、前掲『竹富島誌 民話・民俗篇』、37-39頁。
- (27) この伝説については、上勢頭亨が「根原金殿と与那国島の伝説」として前掲『竹富島誌 民話・民俗篇』に収録している（44-45頁）。なお、上勢頭はこの伝説を含めて竹富島の鍛冶伝承について考察している（『竹富島の鍛冶伝承』、『沖縄文化研究』9、法政大学沖縄文化研究所、1982年、64-103頁）。
- (28) 先島諸島に鉄器ならびに製鉄技術が伝来したことが先島の各島々の生産力を高め、それがそれぞれの島での政治社会の形成につながった。そうした政治社会の成立と政治勢力の台頭がやがて先島諸島の島々を「群雄割拠」の時代へと導いていくのである。したがって、鍛冶伝承の残る御嶽は、伝承それ自体は伝説かもしれないが、島社会が大きく変貌を遂げる過程を表していると考えられるのである。鍛冶伝承については、先の下地前掲論文や、上勢頭前掲論文の他にも、次のような文献がある。稲村賢敷、「鍛冶の伝来と天太の時代」、『宮古島庶民史』、三一書房、1972年、148-157頁。司馬遼太郎、『街道をゆく6 沖縄・先島への道』、朝日新聞出版、2008年、122-130頁。
- (29) この時代区分については、慶世村恒任、『宮古史伝』、富山房インターナショナル、2008年、参照。
- (30) 「忠導氏系図家譜正統（原）」、平良市史編さん委員会編、『平良市史 第3巻 資料編1 前近代』、1981年、所収、341頁。なお、『球陽』にも仲宗根豊見親に関する記述がある。『球陽』、前掲書、129頁。
- (31) 同前、337頁。なお、仲宗根豊見親を含む目黒盛豊美親の系譜については、次の文献を参照。下地利幸、「旧記にみる家譜の成立前夜～目黒盛豊見親の系譜から見えてくるもの～」、宮古島市総合博物館編、前掲誌、第12号、2008年、1-10頁。
- (32) 「按司の代」「殿の代」における「群雄割拠」の状況については、次の文献を参照。稲村、前掲書、139-192頁。慶世村、前掲書、35-88頁。
- (33) 前掲『球陽』、108頁。与那覇勢頭豊見親については、次の文献を参照。下地和宏、「与那覇勢頭豊見親について」、宮古島市総合博物館編、前掲誌、第12号、11-26頁。下地利幸、「与那覇勢頭豊見親の出自を考える～「与那覇勢頭」は倭寇由来の名称か～」、宮古島市総合博物館編、前掲誌、第18号、2014年、116-141頁。
- (34) 同前、106頁。
- (35) 大立大殿から仲宗根豊見親への権力継承については、次の文献を参照。下地和宏、「大立大殿と仲宗根豊見親—宮古島主長の継承をめぐる—」、宮古島市総合博物館編、前掲誌、第13号、2009年、1-14頁。
- (36) 稲村、前掲書、213-232頁。
- (37) 前掲『球陽』、108頁。なお、稲村賢敷編、前掲書、『宮古島旧記』の「比屋地御嶽」の項で、稲村は比屋地御嶽の主神が「あからともがに」と称する神で、久米島から渡来した兄弟神の兄神にあたり、弟神が八重山島に渡って於茂登嶽の神となったとする別伝を紹介している。稲村編、前掲書、85頁。
- (38) 『慶来慶田城由来記』については、石垣市総務部市史編集室編、『石垣市史叢書 1』に全文が収録されており、本稿もそれにしたがっている。石垣市総務部市史編集室編、『石垣市史叢書 1』、1991年、2-24頁。
- (39) 同前、2頁。
- (40) 同前、2-5頁。
- (41) 慶来慶田城用庶については、この他に、岩崎卓爾が、用庶が「自然の巨童」にして「身幹長大、精悍無隻ノ勇士ナリ」であったことや与那国島の鬼虎攻めに参加したことといった伝承を収録している。前掲『岩崎卓爾一巻全集』、53-54頁。
- (42) 前掲『球陽』、147頁。なお、オヤケアカハチの乱については、次の文献を参照。伊波普猷、「仲宗根豊見親の苦衷」、『古琉球』（『伊波普猷全集 第1巻』、1974年、所収）、214-227頁。三木健、「近

- 代八重山におけるアカハチ観の形成—英雄と逆賊からの超克—、『八重山近代史の諸相』、文嶺社、1992年、115-134頁。崎山直、「オヤケ・アカハチ—その虚像と実像—」、『青い海』、春季号、1975年、91-97頁。宮城信勇、「オヤケ・アカハチ、ホンガワラは同一人の呼称」、八重山文化研究会、『八重山文化論集』、第2号、1980年、113-126頁。牧野清、「南島中世史の研究—とくに宮古、八重山両島の高唱をめぐって—」、南島史学会編、『南島—その歴史と文化— 3』、第一書房、1980年、所収、65-100頁。石垣博孝、「八重山・離島苦の島々—オヤケアカハチの乱を中心に—」、谷川健一（著者代表）、『海と列島文化 第6巻 琉球弧の世界』、小学館、1992年、所収、532-554頁。大瀧永亘、『オヤケアカハチ・ホンガワラの乱と山陽姓一門の人々』、先島文化研究所、2006年。
- (43) オヤケアカハチの乱については、オヤケアカハチとホンガワラの2人が首謀者であるとの記録があるが、そうではなく、ホンガワラはアカハチとは別の人名ではなく称号に過ぎないという見解もある。これについては、宮城前掲論文を参照。
- (44) 前掲『球陽』、147-148頁。
- (45) 前掲『岩崎卓爾一卷全集』、23頁。
- (46) 明底獅子嘉殿については、『球陽』に、「此の人、性質篤実にして心操忠義なり。敢へて妄りには行はず」「克く忠誠を守りて赤蜂等に從はず」と記されている。前掲『球陽』、148-149頁。
- (47) 稲村、前掲書、215頁。
- (48) 前掲『球陽』、147頁。
- (49) 前掲『岩崎卓爾一卷全集』、26頁。
- (50) 前掲『球陽』、149頁。
- (51) 同前。
- (52) 同前、150頁。
- (53) 同前、148頁。
- (54) 前掲『慶来慶田城由来記』、2頁。
- (55) 前掲『球陽』、149頁。
- (56) 同前、158頁。
- (57) 西塘については、『球陽』に次のように記されている（前掲『球陽』、158頁）。

八重山武富島に西塘なる者有り。其の人となりや、賦性俊秀にして器量非凡なり。中山の大里等、其の才の衆に出づるを以て、遂に此の人を帯びて中山に回りどり、即ち西塘をして法司家に供奉せしむ。

この記述にしたがえば、西塘は才能を見出された結果として首里に赴いたことになる。

一方、『琉球国由来記』の「国仲御嶽」の由来を記した項には次のように記されている（前掲『琉球国由来記』、494頁）。

昔当島へ悪鬼納ガナシヨリ御征伐ノ時、竹富島にニシタウト云者召取ラレ、悪鬼納ガナシへ罷登リケル。

この記述にある「召取ラレ」という表現を重視すると、西塘は、文字どおり、王府軍に召し取られて捕虜として首里に連れて行かれたということになる。この見解を示したのが西里喜行である（西里、前掲論文）。なお、前掲『星砂の島』西塘特集号では、両者の見解をめぐる議論が掲載されている。

- (58) 前掲、『球陽』、158頁。
- (59) 同前。前掲『琉球国由来記』、494-495頁。
- (60) 同前、『球陽』、158-159頁。同前『琉球国由来記』、498-499頁。
- (61) 前掲『岩崎卓爾一卷全集』、57頁。
- (62) 同前、18頁。
- (63) 牧野、前掲「南島中世史の研究」、89頁。
- (64) 崎山、前掲論文、96頁。

(65) 稲村、前掲書、214頁。

(66) 例えば、牧野、前掲「南島中世史の研究」、85頁。

(2015年4月23日受領、2015年5月28日受理)

(Received April 23, 2015; Accepted May 28, 2015)